Season2　Episode 2: Insight into the APAQG.

Susan Matson: 皆さん、こんにちは。司会のスーザンマトソンです。本日は渡辺 秀さんをお迎えしています。渡辺さんは三菱重工業株式会社で民間航空機品質システムの責任者を務めています。また、IAQGのAPAQG部門のリーダーでもあります。ようこそ、卓さん。

Suguru Watanabe: はじめまして。ありがとうございます。

Susan Matson: ありがとうございます。さて、以前にもリスナーの皆様にお話ししたことがあるのですが、IAQGは地域別に構成されていることを改めてお伝えしたいと思います。3つのセクターには、アメリカ大陸のAAQG、ヨーロッパとアフリカ、中東のEAQG、そしてAPAQGがあります。アタナベさん、APAQGの地理的範囲についてリスナーの皆様に説明していただけますか？

Suguru Watanabe: APAQGはアジア太平洋地域をカバーしています。非常に広範囲です。東から西までカバーしています。APAQGは9カ国で構成されています。国名は中国、韓国、日本、インド、シンガポール、台湾、タイ、フィリピンです。そして、35社のメンバー企業が参加しており、32社がIAQGのメンバー、3社がAPAQGのメンバーです。そして、中国、韓国、日本、インド、シンガポールが、この国際品質グループを組織しました。

Susan Matson: 35社のメンバー企業と、その下に32社のIAQGメンバー企業がいます。これは非常に大きな数です。APAQGのセクターメンバー数を拡大するために、どのような取り組みをされていますか？また、それを継続していくためにどのようなことをされていますか？

Suguru Watanabe: 私たちはメンバー数拡大のためのプロモーション活動を行いました。2015年にはタイでプロモーション活動を行い、マレーシア、インド、インド、オーストラリア、ニュージーランドを拠点にプロモーション活動を行いました。

Suguru Watanabe: これらの国々からメンバーが参加しており、特にインドからは多くのメンバーが参加しています。インド航空宇宙品質グループおよびそのメンバーは、AIMMやSCMHの執筆チームなど、IAQG、APAQGの活動を支援しています。ええ、私たちはCOVID 19の状況に直面しました。現在、シンガポールでのAPAQG会議のような対面式の会議を再開しています。

Suguru Watanabe: シンガポールでの会議では、私たちの活動を紹介するサプライヤーフォーラムも開催しました。ですから、私たちはさまざまな国々からより多くのメンバーを募っています。

Susan Matson: 素晴らしいですね。そして、スクリーン越しのみの会話を何年も経た後で、つい先ほどシンガポールで開催された対面式の会議は、さぞかし良かったでしょうね。

Suguru Watanabe: はい。

Susan Matson: もし、話を聞いてくださっている企業の中に、APAQGに参加したいとお考えの企業があれば、APQG.orgのウェブサイトにアクセスして、APAQGのセクターのリンクをクリックしていただくと、そのことについての情報をご覧いただけます。それでは、メンバーの種類についてお話しましょう。APAQGにはいくつかのメンバーの種類があります。加盟企業、そしてAPAQG1とAPAQG2があります。これは、他の2つとは異なり、このセクター特有のものです。 それでは、異なるレベルについて説明していただけますか？

Suguru Watanabe: 私たちは、多くの企業がIAQG、APAQGの活動に参加することを歓迎しています。 そして、私たちの活動を拡大するためには業界団体の支援が必要です。 そこで、私たちはカテゴリーAPAQG1を、すでにAPAQG加盟国で議決権を有する企業、または同じ親会社に属する子会社、そして比較的小規模な企業のために設定しました。

Suguru Watanabe: そして、各国の業界関連の協会や国家機関を対象にカテゴリーAPAQG2を設定しました。APAQGの活動は、これらの組織の貢献によって支えられています。

Susan Matson: 素晴らしい。それは興味深いですね。先ほどあなたが出席されていたセクター会議では、それらの組織がすべて集まったのですね？

Susan Matson: それらの会議では、IAQGレベルで取り組んでいるさまざまなプロジェクトやイニシアティブについて話し合われますが、個々のセクターでも同様です。 それでは、いくつかお話を伺いたいと思います。まず、私がリストアップした中で、ぜひコメントいただきたいのが、単一のSDO、つまり、私たちの規格の単一流通イニシアティブについてです。少しお話いただけますか？

Suguru Watanabe: 単一のSDO、つまり、私たちは単一のSDOの開発と移行を支援し、関与しています。私たちは、規格の草案作成など、単一のSDOのプロセスを理解するために会議を行いました。規格の貢献内容、投票、発行などです。

Suguru Watanabe: さらに、これらのプロセスを円滑に適用できるよう、IAQGの要求手順に関する最新の変更点についても説明しました。IAQG規格評議会にメンバーを配置し、移行プロセスの準備を進めるとともに、CAQG、AAQG、JAQGの支援を受けながら、現地語に翻訳された規格の中心となる部分を設定しています。

Suguru Watanabe: そして、現地語に翻訳された規格の発行プロセスに焦点を当て、新しいプロセスが円滑に適用されるようサポートしていきます。現地語とは、ええと、中国語、韓国語、日本語のことですね。

Susan Matson: 素晴らしい。そして、特に貴方の、ええと、APAQGの構成員にとって非常に有益なものになるでしょう。

Susan Matson: では、9120とICOPスキームについて、特に日本で構築されているものについてもお話しましょう。

Suguru Watanabe: はい。ICOPスキームについては、IPQG認証スキームの下で日本に設立されたのは2カ国だけです。9120のICOPスキームの設立は進行中で、日本の認定機関によって認定された認証機関による監査活動が今年開始される予定です。

Susan Matson: さて、日本では9120ですが、9100スキームについてはインドで作業が進行中です。その件についてお話いただけますか？

Suguru Watanabe: ええ。インドは、昨年認証スキームの構築に着手しました。まず認定された認証機関の計画を開始しました。

Suguru Watanabe: IAQG COTとAPQG COTは、構築計画のいくつかの行動を支援しています。彼らは2024年に独自のICOPSスキームを確立しようとしています。

Susan Matson: 素晴らしいですね。2022年に開始されたので、あと2年で完成する予定です。また、COTは比較的新しい組織で、認証監督チームの略称であり、OPMTの新しい名称です。

Susan Matson: 次に、物理的な会議や実際の活動、そしてCOVID 19の制限後の関与への移行について、もう少しお話ししましょう。それはどのように変化したのでしょうか？

Suguru Watanabe: はい、私たちは今年から対面式の会議に戻すための活動を始めていますが、国境を越えた移動にはまだいくつかの制限があります。

Suguru Watanabe: 第39回APQG会議はシンガポールで開催されました。しかし、完全な対面式ではなく、オンライン共有のハイブリッド形式でした。この会議は、COVID-19以降初めての物理的な会議でした。

Susan Matson: 活動が活発化しているようですね。それをどのようにモニタリングしているのですか？また、メンバー企業がどれだけ参加しているか、また参加を促すにはどうすればよいのでしょうか？

Suguru Watanabe: ええ、APQGでは各社の参加状況を評価する手順を定めており、それに基づいてリーダーシップチームが毎年評価を行っています。評価を行ってから今年で4年目になります。評価の結果、参加が少ない企業があれば、セクターリーダーが改善を要請します。

Suguru Watanabe: 例えば、昨年は1社に改善を求めました。そして、IAQG会議への参加を含め、即時の改善が見られた実績があります。特に、IAQG運営会議への出席と議論、IAQGの全メンバーへのSCMH執筆チームへの参加を求めました。

Susan Matson: そして、まさにそれが求められているのです。つまり、参加企業、会員企業が本当に針を動かし、IAQGのイニシアティブや使命を達成する必要があるのです。数年にわたって進められてきた、そうした大きなイニシアティブのひとつが、OASIS V3への移行です。最も楽しみにしていることは何でしょうか？

Suguru Watanabe: OSV3の稼働です。改訂された規格に基づく変更を含むすべての機能が即座に収集され、すべてのデータが新しいデータベースに移行されます。OSV3はデータベースです。ですから、データ分析を活用した新しい活動が展開され、業界の品質改善に貢献することを期待しています。

Susan Matson: はい、Oasis V3ではデータが膨大になります。誰もがそれを楽しみにしていると思います。では、もし誰かがAPAQGに関心を持っていたり、アジア太平洋地域におけるIAQGについてあまり詳しくなかったり、それが自分たちにとってなぜ重要なのか分からなかったりした場合、その人たちに共有してほしいことは何でしょうか？あるいは、リスナーに共有したいことは何でしょうか？

Suguru Watanabe: アジアには多くの国があり、それぞれの国には航空宇宙産業の発展と各ステーションでの発展の歴史があります。APQGは発展のプロセスを支援し、IAQGへの参加を主導します。ですから、私たちはいつでも新しい参加を歓迎します。

Susan Matson: 素晴らしいですね。新しい参加者を心待ちにしています。ええと、その前に言っておくべきことがあります。リスナーの皆さんに、あなたについて少し背景を教えていただけますか？ 秀さんは、90年代にエンジニアリングの分野でキャリアをスタートされましたね。 また、2020年からIAQGに参加されています。 そのことについて少しお話いただけますか？

Suguru Watanabe: わかりました。私は三菱重工の民間航空機システム部門の責任者です。三菱重工に入社したのは1990年で、名古屋航空宇宙システム製作所に入りました。東京工業大学で学士号を取得した後、

Suguru Watanabe: 私は国際宇宙ステーションの日本実験棟「きぼう」の品質エンジニアとしてのキャリアをスタートさせました。主に、安全分析を行い、安全性と保護の保証を担当しました。2003年には、複合材主翼開発チームの品質エンジニアリングリーダーとして参加しました。

Suguru Watanabe: そして、2008年には複合材主翼の製造エンジニアリングチームと製造を管理しました。その後、2010年に品質部門に戻り、主翼と胴体、構造、組立、部品製造、および各種民間航空機のサプライチェーンの品質管理を担当し、現職に就くまでその任にありました。そして、2020年にIAQG APAQGの活動に参加しました。

Suguru Watanabe: 私は2020年からAPAQGのリーダーを務めています。2022年3月のAPQG会議でセクターリーダーに承認されました。その後、2020年のIAQG投票メンバーと合意しました。2022年のIAQG総会では、セクターリーダーおよび執行委員会メンバーに選出されました。

Susan Matson: そして、あなた方をお迎えできてうれしく思います。ありがとうございました、渡辺さん。お時間をいただき、APAQGで起こっていることについて詳しく教えていただき、感謝いたします。今後とも頑張ってください。ありがとうございました。以上、スーザンマトソンがお送りしました。IAQG Quality Horizonでした。それではまた次回まで、ご安全に。